

# 日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的狙い

金 甫桃（嘉泉大学）

## 発表要旨

モンゴル帝国の登場と拡散という世界史的な出来事は、モンゴルが高麗に進攻することで高麗にも大きな影響を与えた。モンゴルが高麗に影響を及ぼした期間は、「抗蒙」といわれる戦争期と「干渉期」という戦争後の時期に分けることができる。二度にわたって試みられた「日本遠征」は、干渉期に当たる。これは、モンゴルが高麗に日本の降伏を勧告するように招諭を要求したが、招諭が失敗に終わった後モンゴルが高麗を携えて直接日本征伐を推進させた征服事業であった。

これまで「日本遠征」は、モンゴルが主導し高麗は彼らに動員された戦争として理解する傾向が強かった。しかし、当時の高麗王(元宗および忠烈王)は、第1次遠征と第2次遠征の間に消極的な回避からより積極的な加担へと態度を変化させていることがうかがえる。本稿ではこの事件において当時の高麗王であった忠烈王が態度を変えた部分に注目してみたい。つまり、態度の変化に込められた忠烈王の狙い、政治的目的が何なのかについて調べてみたい。

13世紀後半、忠烈王の政治的な立場に対して、近年集中して検討が行われている。最近の研究の特徴の一つは、高麗をみる立場の変化である。つまり、高麗が一方向的にモンゴルによって動員されたという点を強調する傾向から抜け出し、この時期モンゴルの影響力が強く投射されている状況で、高麗または国王がこのような状況をどのように活用したのか、そしてその変化が高麗一モンゴル間の関係にどのように働いたのかという部分に注目している。

この過程で忠烈王の地位はとても象徴的である。彼は、高麗の国王でありながら、モンゴルと王室間の婚姻をした最初の国王であり、後には征東行省というモンゴルの地方最高単位の長官である丞相になった。しかし、モンゴルの「駙馬(貴人の娘婿)」としての地位、またはモンゴル王室との婚姻は高麗が先に提案した内容であり、「征東行省」はモンゴルが設置したにもかかわらず忠烈王は、行省内で自分の役割も要請した。言い換えれば、高麗王つまり忠烈王は、モンゴル帝国の威勢を借りて王権を確立し、権力を強化しようとする方向からモンゴルの駙馬、丞相という要素を通じて政治的な効果を期待した。

1170年から100年間続いた武臣政権時代に高麗の王権は弱化し続けた。1270年に武臣政権が崩壊し、王政が復古したが、すでにモンゴルとの関係の進展により高麗の様々な既存の体制に変化が現れた。すぐに忠烈王とクビライの娘「忽都魯揭里迷失(後の「莊穆王后」)」との婚姻のように高麗とモンゴル間で王室婚姻が成立し、中書門下省と6部中心だった高麗の官制は僉議府と4司体制となることで、官制もモンゴルの要求によって格下げ、改編された。そして、ダルガチのようなモンゴルの官職や軍隊が高麗に常駐した。こうした状況の変化は結果的に高麗の王権を安定・強化させる要素を再設定するように強要するようになった。

そして、モンゴルは使臣の趙良弼を日本に送り降伏を勧告させ、外交的な接触が失敗に終わると戦争を準備した。使臣の派遣や2度にわたる戦争において、高麗は全面的にモンゴルに協力した。第1次遠征当時、高麗は1274年に高麗は30,500人を徴発し、900隻の船を建造し、高麗軍6千人、水夫6,700人が動員され、1281年の第2次遠征当時は戦艦900隻、軍事1万人、水夫17,000人を動員した。こうした莫大な人的、物的負担に高麗は深刻な困難を経験し、負担の重さを幾度もモンゴル王朝に訴え出た。

こうした政治的な部分、特に忠烈王にフォーカスしてみると、経済的な負担に対する高麗側の訴えとは違った脈絡が垣間見える。忠烈王は、遠征準備の負担を訴えながらも日本の遠征に対して反対はしなかった。時にはそれに応じる姿すら見える。特に、第1次遠征当時、モンゴル軍と高麗軍の指揮層の混乱像を敗戦の原因として指摘し、第2次遠征においては指揮

層の統一性を強調した。そして、そのため高麗側の武官たちを万戸職に任命、金牌賜與など、モンゴル式の官制による指揮権を認めてくれることを要請したりもした。これにモンゴルは、忠烈王の要請を受け入れ、さらには高麗王、つまり忠烈王を征東行省丞相として任命した。これにより高麗王が行省の丞相を兼任する始まりとなった。

ここで忠烈王が注目した部分は、次の三つである。第一に、日本遠征事業に対するモンゴルの強力な意志を王権強化に活用するため、忠烈王は、モンゴルの風習や制度に対する部分を強調した。すぐに、モンゴルの支配層の一員である「駙馬」の義務を強調し、モンゴルが自分に指揮権などを認めさせる名分を提供した。二番目に最初の部分の延長線上でモンゴルに対して指揮権を要請し、これを高麗の將軍たちに適用することになることで、高麗軍はモンゴル軍との一元的な指揮体系を構築することができた。何よりも高麗軍をモンゴルの軍事制度である「万戸」で自分が事実上「任命」できるようになった。三番目に、指揮権に対する忠烈王の要請をモンゴルが受け入れ、それに忠烈王を行省丞相に任命することで、モンゴルは高麗王の役割を認めた。

結局、日本遠征を準備するプロセスの中で、忠烈王はこのプロセスを自分の王権強化に利用しようとする狙いを持っていたと言える。そして、その狙いは忠烈王が丞相となる時点で、ある程度所期の目的を達成したと評価できる。

## 略歴

---

### 主要 経歴 :

- 2012.05.-2014.02. 高麗大 韓国史研究所の研究教授
- 2014.03.-2016.02. 高麗大 BK21PLUS 韓国史事業団の研究教授
- 2017.03.-現在、嘉泉(カチョン、Gachon)大学 Liberal Arts College 助教授

### 主要研究分野 :

- 高麗の政治制度、権力構造などに関心を持っている。
- 高麗成宗、懸鐘台太祖配享功臣の選定過程と意味(2014)
- 高麗前期、魚袋の概念と運営方式に対する検討(2015)
- 高麗、モンゴル関係の展開とダルガチの置廃過程(2015)
- 高麗の対蒙対応論理と「大国イメージ」-1231、1232年の外交文書を中心に-(2015)
- 高麗前期、公服制の整備過程に対する研究(2016)
- 高麗内のダルガチの存在様相と影響-ダルガチを通じたモンゴル支配方式の経験-(2016)

原著：韓国語、翻訳担当：李恵利